

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 おがわ やすひこ  
小川 靖彦

『萬葉集』の本文は、漢字の音訓を用いたいわゆる萬葉仮名によって記されており、それをいかに訓み解いていくかが、平安時代以降の歌人・学者の大きな課題となった。本論文は、そうした課題が追尋されていく過程を、学問史の観点から明らかにした論である。

全体の構成は、「第一部 萬葉集写本史の新しい視点」「第二部 日本語史・日本文学史のなかの萬葉集訓読」「第三部 仙覚の萬葉学」「第四部 仙覚の萬葉学の行方」の全四部十四章からなる。また、首尾に序章、終章を配する。

第一部では、天曆古点時の『萬葉集』が、題詞が高く歌の低い形態であったこと、さらにその付訓が平仮名別提形式であったことを、厳密な考証によって明らかにしている。また平安後期の後三条天皇・白河天皇の新政に積極的に関わった廷臣が、政教主義・礼楽振興のうねりの中で、『萬葉集』を聖武天皇勅撰の歌集と捉え、一種の規範として尊重していた事実を指摘したことも、新見といえる。一方で、題詞の低い体裁が一般化する中、平安後期の二条天皇周辺において、再び題詞の高い体裁を意識的に復活させ、さらには片仮名傍訓形式が創始されたことを指摘し、それが『萬葉集』の漢字を尊重する姿勢に基づくことを論証して、次代の仙覚の『萬葉集』校訂の営為に結びつけたことは、卓抜な見方であるといえる。

第二部では、平安時代から中世に至る『萬葉集』訓読の方法を丁寧にとどる。とりわけ重要なのは、従来、口頭伝誦を通じた流入とされてきた『古今集』の「萬葉歌」が、『萬葉集』の漢字テキストの訓読を経たものであることを、具体的な事例によって明らかにした点であり、画期的な発見といえる。さらに、天曆古点の実態を、桂本と次点系諸本の訓法を丹念に比較することで、そこに「詩法」とも呼びうる一定の方法が存在することを論証し、その訓読が天曆時代にふさわしい、天皇制の権威を示す一大文化事業であったことを明らかにしている。緻密かつ間然するところのない見事な考察である。

第三部は、仙覚の『萬葉集』研究の具体的な考察で、本論文の核心をなす。『萬葉集註釈』の周到な諸本調査の成果を冒頭に置き、その注釈を支える「道理」と「文證」とが、単に論理的根拠と文献的証拠ではなく、もの本来の姿を求めてやまぬ強い理念性と実践性を備えた、十三世紀の時代の思考を象徴する「知」の形式の提示であることを明らかにしている。さらに「ことわり」を重視する姿勢が、その注釈の理法と詩学の根本にあることを具体的に論証しており、仙覚の『萬葉集』研究の本質を鮮やかに照らし出している。これまでの仙覚研究を大きく凌駕する、瞠目に値する考察といえる。

第四部は、仙覚以後の萬葉学のありかたを探ったもので、『拾遺采葉抄』『萬葉集目安』を取り上げ、仙覚の学統がどのように継承されたのかを具体的に考察している。

以上のように、本論文は、萬葉学の展開の過程を学問史としてとどることで、多くの新見を含む画期的な成果をもたらしている。論証の態度はまことに厳格であり、国語学・歴史学・仏教学などの隣接諸学の成果をも充分に取り込んだ、重厚かつ犀利な論になっている。仙覚の寛元本、文永本の校訂方法についての言及がやや不足する点が惜まれるものの、その成果はきわめて高く評価しうる。よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。